【中沢新一寄稿】

アースダイバー in 熱海

記憶の粒子を手繰り 土地の野生を蘇らせる

縄文地図を片手に、街を歩き回り、神話や伝説を頼りに、土地の記憶を探る…。中沢新一が紡ぎ出す熱海創世の物語には、目の前の風景を一変させるチカラがあった。『アースダイバー』が示唆する歴史コンテンツ展開のヒントとは。

撮影＝清水知成、地図作成＝深澤晃平（多摩美術大学芸術人類学研究所特別研究員）

中沢新一
×
講談社
×
リサーチセンター

「熱海」の地名は、古代の海人族「あづみ＝安曇」から来ている。海人と呼ばれたこの人々のおおもとの出身をたどると、古代のインドネシアあたりにあって水没したスンダランドという巨大大陸に行き着く。おそらく水没をきっかけとして太平洋に乗り出し、島伝いに北上を続けたこの人々の先祖は、一万年以上も前にはすでに日本列島にたどり着いたと言われている。潜水や海の漁に巧みなこの人たちは、朝鮮半島の南部と北九州を共通の故郷として、たくましく海に生きてきたのだった。

北九州を本拠地としていた安曇族が、いつごろから列島の各地に進出していったのかは不明だけれど、もう五世紀の頃には紀伊半島、渥美半島、伊豆半島・諸島などの、太平洋岸の海岸や入り江には、この人たちの到着を知らせる、さまざまな痕跡が残されている。

安曇の人々がいまの熱海に上陸した頃、そこにはすでに縄文時代以来そこを生活の場にしてきた、先住の人たちがいた。彼らが使っている土器こそ、もう以前のような厚手の縄文土器ではなく、薄くてつるつるした新式の土器になり、水田による稲の耕作もはじまってはいたけれど、巨木の下に「ミシャグチ」という太古からの神を祀る宗教も、風習やものの考え方も、縄文の古風をそのままに残していた。

熱海の隣の来宮駅に降り立つと、そこがまさに古代に安曇の人々が上陸した地点であることを感じる。あたりを念入りに散歩する。土地から立ち上ってくる記憶の粒子のようなものに触れるためには、これがいちばん簡単でよいやり方だ。そのあと私たちは、海岸に降り、砂浜に座って目をつぶり、自分が五世紀の頃の安曇族の船乗りになったと想像して、はじめて見る熱海の海岸に上陸した朝のことを、思い浮かべてみることにした…

細身の小舟を操って、伊豆半島に到着した安曇たちは、複雑な入り江の多いこの半島が気に入って、家族の集団ごとにそれぞれが気に入った入り江に入っていった。私たちはまだ先まで行ってみようと決めて、半島を回りきってみることにした。すると向こうのほうに、白い砂の美しい海岸が開けているのが見えたのだった。海岸に近づくにつれて、あたりには海面すれすれに濃い靄のようなものがたちこめはじめた。海中からボコボコという泡が砂を巻き上げていたが、海中に手を差し入れてみると、なんとそれは温かい水だった。

白い砂浜の向こうには、すぐそこまで濃い緑の森と山が迫っていた。その山に深い渓谷がうがたれていて、中腹あたりにこのあたりでは見たこともないほどに巨大な楠の大木が、何本もそびえ立っているのが、海からでもよく見えた。私たちの家族はこの楠の大木群に誘われるように、渓谷の水が海に流れ出る河口近くの砂浜に、舟を乗り上げることにした。

海辺には、早くも私たちの到着を知った先住の人々が集まりはじめていた。彼らは何千年も前からこの島に住み着いてきた人々で、穏やかな性格のとても賢い人々で、私たちは列島のどこへ上陸しても、この人たちとはよい関係を保つことができた。

この村の人たちは、私たちが何者であるかを、すでによく知っていて、私たちを指さして微笑みながら「ア・ズ・ミ」と呼んだ。片言ではあっても、私たちは言葉を交わすこともできた。海岸べりで私たちは贈り物を交換しあう「出会いの儀式」を、厳かにとりおこなった。私たちが一束の極上の勾玉の首飾りを、立派な体格をした首長に手渡すと、みんなの表情がいっせいに喜びに輝いたのがわかった。お返しに私たちは木の実や魚介などたくさんの食料をもらったが、長い航海を続けている私たちには、これがいちばんの贈り物であるということを、この人たちはよく知っていたのである。

海岸につくられた新しい小屋で、その晩、私たちは何日かぶりで安心してぐっすりと寝ることができた。翌朝、朝食をもって村の女たちが小屋を訪れてきた。彼女たちはものも言わずに食べものを置いて帰っていったが、それがこのあたりの作法であるらしい。しばらくすると、首長がやってきて、朝御飯を食べている私たちと気軽な雑談をはじめた。私は首長に、海から見えたあの楠の巨木のあたりには何があるのかとたずねた。首長はすばらしい勾玉のお礼に、私をそこに連れていってくれることを約束してくれた。「あそこは男しか近づくことができない神聖な場所だ。あなたの家族で大人の男はあなただけだ。だからあなたしか許されない」。こう言い残すと、首長はゆったりとした歩調で、少し高台になったあたりにつくられている彼らの村へと帰っていった。

昼過ぎに迎えが来て、私は身繕いをして、小屋の外に出た。細い道が、渓流に沿って走っていた。急な坂道に息が切れたが、鬱蒼たる森に囲まれて、あたりの空気はひんやりとしていた。坂の途中に

小さな広場があり、そこに首長が厳かな表情をして立っていた。私たちは黙ったまま渓流沿いの道を登って行った。むせかえるような草の匂い。すさまじいほどのヒグラシの鳴き声が、無言で歩む私たちを圧倒する。

そしてとうとう、巨木の群れの足元に私たちは立った。恐ろしいほどの存在感で、楠の巨木は生きていた。大木の裏側に回ると、そこには大きな虚（うろ）ができているが、その形が女性器にそっくりなのには驚いた。木の根元には石棒を中心に、たくさんの配石をめぐらせて、儀式のための空間がつくりだされていた。呆然としている私の表情を見て、首長は満足そうだった。「ここにはたくさんの秘密がある」とだけ、そのとき首長は私に語った…。

この海岸を気に入った安曇の人々は、こうして　川の両岸を切り開いて、自分たちの村をつくりはじめた。精神的な中心である楠の巨木の聖域から流れ出る水のそばに住んでいると、いつも自然の神の力に触れていられるように感じたからである。船大工の技術に巧みだった彼らの中には、それを生かした木の細工や上手な大工として知られるようになったものたちもいたようで、いまでもこの川の両岸に好んで住み続けている人々は、ひょっとしたら古代の職人の末裔たちなのかも知れない。

こうして、熱海の基礎は、安曇の人々の定住とともに築かれた。楠の巨木が林立するあの渓谷が、新しい村の精神的な中心となった。伊豆半島に散って行った安曇の人々は、自分たちの精神的な中心となる場所に、「来宮（きのみや）」という名前をつける癖があった。そのために、この楠の巨木を中心とする聖域も、この名前で呼ばれることになった。

漂着者としてたどり着いたという自分たちの来歴の記憶を、その名前にこめようとしたのか、あるいは海人族に独特な「海の彼方から来訪してくる神」の信仰によって、その名前がつけられたのかはわからない。しかし、巨木と石で構成されるその神は、いずれ熱海と呼ばれることになるこの土地に生きた人々の心の故郷が、つねに海の向こうの世界に想像されていたことを、よくあらわしている。

楠の木は深く大地に根を下ろし、天空高くそびえている。海中に湧きだす温泉もまた、地中にしみ込んだ雨水がとうとう地中深くマグマに触れて温水となり、地上に戻ってきた姿をしめしている。大地の底と天空をつなぐ樹木、大地に潜む巨大な蛇（竜）の燃えるからだの感触を地上に伝える温泉。そしてそこに生きる人々の心は、海上はるか彼方の世界に注がれる。熱海という土地を生み出した世界観は、じつに深くて広大だが、それはまず来宮神社を中心とするいまの熱海の南西部の海岸で、かたちづくられたのだった。

ところが、熱海にはもうひとつの中心があった。それはいまの伊豆山神社のある北東の山裾、「走湯」と呼ばれている場所である。そこでは海中からお湯が湧きだしているのではなく、崖に吹き出した高熱の温泉が、ものすごい勢いで海に向かって吹き出していた。古代人とくに狩をして山中を歩くのがうまかった縄文人は、自分たちが歩いている地面の下で何が起こっているのかについて、きわめて敏感な人々であったから、海中にお湯を吹き出している水脈が、その山（そのあたりはのちに日金山と呼ばれることになった、新幹線のトンネルがぶち抜いてある山である）の内部を貫いて走り、ついには箱根の温泉にまで達する、気も遠くなるほどに雄大な竜の身体の一部であることを、知っていた。

長く地中を走り続けた竜の身体が、走湯の海岸段丘に到着するや、そこで温泉に姿を変えて、海に向かって吠えたてているのだ。来宮神社に依る安曇の人々も、この地帯には容易には近づかなかった。そこに最初に足を踏み入れたのは、「山臥（やまぶし）」と呼ばれた山岳宗教の行者たちである。熱海の場合、その山岳宗教者は「秦」という渡来系の氏族の人々だった。時代が古代から中世に移り変わろうとしていた頃、彼らは竜の口から少し山の中に入ったあたりの小さな平地を開いて、そこに自分たちの修行の場所を築いた。日金山修験の道場である。

中世になると、そこは伊豆山神社として、政権を執った武士たちに深く崇敬されるようになる。走湯から神社まで、急な山肌には見事な石段が築かれ、その参道にはたくさんの堂宇が立ち並び、里修験の人々の暮らしの場所としても、おおいに賑わった。熱海南東部の来宮神社のあたりが穏やかな植物性の波動を放っているのに対して、走湯神社の周辺には、熱をはらんだすさまじいほどの自然力が放出され、それを神秘のバリアが包み込んでいた。古代から中世にかけての熱海は、来宮神社と走湯神社というふたつの聖域を極に持つ、尋常ならざる海岸世界をかたちづくっていた。

江戸の近世になって、このふたつの聖域の間に、世俗的な温泉の村が開かれるようになって、ようやく、熱海は庶民にも近づきやすい歓楽の場所に変貌していったのである。人々はここが遠い昔海人族が目指した楠の巨木に精神のよりどころをもつ聖域から発展し、自然の威力の地上に吹き出している走湯の驚異によって知られた場所であることを、しだいに忘れるようになった。二十世紀も後半になると、そこは生産と消費がカップルになった資本主義にとっての、ひとつのユートピアとして、おおいに隆盛をきわめることになったが（よく労働した庶民がここで夢を蕩尽するのである）、その時代にも、熱海がまれにみる自然力の聖域であることは、忘れ去られたままだった。

その熱海が、二十一世紀にふたたびよみがえろうとしている兆しを、いろいろなところで私は感じとる。惑星的な意識を発達させた現代の人間には、熱海の地下に眠っている「野生の記憶」が、なによりも魅力的に感じられるのだ。来宮神社の楠の大木はまだ生きている。走湯はいまもぼこぼこと音をたてて、竜の雄叫びを海に向かって放っている。熱海を歩き、温泉につかるとき、身も心も裸になった私たちは、地球惑星の深部から送られてくる信号と波動に、素肌で触れているのである。どんなスポーツによっても得られない、自然力との直接のコミュニケーションだ。日本の温泉文化の二十一世紀は、おそらくそこからはじまるだろう。

アースダイビングへの手引き

熱海取材密着ルポ

縄文時代の地形を調べ、歴史資料を集める。
大まかなルートを設定し、実際に街を歩く…など。
まずは今回の「アースダイバー in 熱海」で
取材チームが実際に経験した
事前の準備や当日の模様をレポートする。

※本研究は上記エリアを調査対象とした　※遺跡は発掘された場所を示しており、現在見学できないものも含まれている
※海岸線は縄文時代の陸地と考えられる境界を示す

熱海取材当日に感じた アースダイバー的旅の楽しさ

土地そのものの持つ野性的な力が、一万数千年の時を経て、現代の町並みに与え続ける影響を読み解く。『アースダイバー』のユニークな視点に、日本の観光再生のヒントを探る本企画。第一回の今回は、静岡県の熱海温泉を訪れた。

取材当日には、伊豆山神社や来宮神社など、古くから熱海の人々の精神的な拠り所となっていた場所をはじめ、上宿町や本宮神社など、一般の観光ではなかなか訪れない場所も訪問。随所で展開される中沢先生の思考に、舌を巻き、そして、想像力をかき立てられた。また、実際に体験するとアースダイビングが史料をもとに、土地の歴史を解読するだけの作業ではないことがよくわかる。身体と心を使って土地の〝現在〟を五感で感じる。これはつまり「旅」なのだ。

さらに、印象的だったのは、中沢新一という巨大な〝知〟と歩くだけで、町歩きが驚くほど刺激的になること。過去に何度も熱海を訪れているが、一番面白く、発見の多い熱海の「旅」だった。

アースダイブ Point 1

伊豆山神社

いずさんじんじゃ

走湯から、伊豆山神社を経て、白山神社、さらに本宮神社へ。これは、熱い温泉を放つ竜の口（走湯）を起点に、地中を走る巨大な竜の背中に沿って山肌を登っていくルートだ。伊豆山神社から山道を歩いて20分ほどの白山神社には、開けた空間があり「ここは修験者たちの道場だねぇ」と先生。鬱蒼とした木立に囲まれたこの一帯には、独特の雰囲気がある。

伊豆山神社から急な山道を歩き、白山神社へ

最上部の本宮神社で、各社の位置関係を改めて確認する

アースダイブ Point 2

来宮神社

きのみやじんじゃ

古くは「来宮」ではなく「木宮」と記されたという神社には、樹齢2000年を超えるご神木の大楠があった。圧倒的な迫力で立つ巨木をひと周りした中沢先生は「ここが熱海のはじまりの地だね」とひと言。すぐそばを渓流が流れ、巨木が林立する静かな境内には“はじまり”の時と変わらない空気感が今なお漂っているように感じられた。その後、取材チームは、神社の由緒や祭神などを確認。さらに禰宜に神社や大楠にまつわる逸話などを伺う機会も得た。

神社の由来などの話しを伺う

大楠の背後には大きな虚（ウロ）。「女性器だね」と先生

アースダイブ Point 3

上宿町

かみじゅくちょう

来宮神社で「古くから集落があった地域」と聞き、神社脇を流れる糸川の下流へ。徒歩5分ほどの上宿町エリアを散策した。「この辺りには豊富な木材の恩恵にあずかった職人も多かったはず。今も彼らの末裔たちが、住んでいるのかもしれないね」と中沢先生。周辺を見渡すと、不思議なことに建具屋さんなどがちらほら。普通なら観光客は立ち入らないであろう素朴な町並みが、急に興味深い風景に思えてくる。

散策途中で出会った地元の方から情報収集

アースダイバーとは？

『アースダイバー』
講談社1890円

縄文時代の地形という視点から、現在の東京の成り立ちを読み解いた一冊。なぜここに東京タワーが?どうして新宿はこんな街に?縄文時代の記憶と、近代的な都市計画が複雑に絡み合う東京創世の物語は、慣れ親しんだ街の風景を一変させるほどのインパクトがある。

中沢新一
なかざわ・しんいち●1950年、山梨県生まれ。多摩美術大学教授。芸術人類学研究所所長。宗教から哲学まで、芸術から科学まで、あらゆる領域にしなやかな思考を展開する思想家・人類学者。『アースダイバー』、『チベットのモーツァルト』、『カイエ・ソバージュ』全五巻、『緑の資本論』など著書多数。

How To アースダイブin熱海

事前準備

縄文海進期の地形を現代地図にトレースした《アースダイビングマップ》を作成。並行して、歴史資料を収集。今回は熱海市の協力を得て、市史や歴史年表などの資料を集めた。

ルート設定

事前準備の結果をもとに、大まかなルートを設定。特に神社や墓などの聖域は、古くから場所が変えられていない可能性が高いため、ルート上の最優先ポイントとなった。

現地取材

事前に設定したポイントを中心に歩き、地元の方のお話しなども伺った。移動手段は基本的に徒歩だったが、取材チームが10名を越える大所帯のため、必要に応じてバスも利用した。

当日の取材ルート

Start 11:00
熱海駅集合
↓
● 来宮神社
↓
● 上宿町
↓
湯前神社
↓
海蔵寺
↓
水口町
↓
芸妓見番
↓
走り湯
↓
● 伊豆山神社
↓
白山神社
↓
本宮神社
↓
熱海秘宝館

アースダイブ的に重要な「岬」の熱海秘宝館へ!
↓
熱海駅にて解散
Goal 18:00

熱海の源泉のひとつ大湯の目の前に位置する神社へ

熱海の記念に集合写真もパシャリ!修学旅行のよう

伊豆山エリアは走湯から調査をスタートした

古来の人々と同様に、神社で「祈る」

【JRC考察】膨大な知識と逞しい想像力 中沢新一と歩く熱海は それまでの熱海と何が違ったのか？

慣れ親しんだ風景を一変させる力強い物語

「海岸線沿いにホテルや旅館が建ち並び、観光客たちが闊歩する華やかな温泉街」というステレオタイプな熱海温泉の認識は、冒頭の中沢先生の原稿を読めば一変するだろう。伊豆山には温泉となった巨大な竜が身を横たえ、来宮には神々しい巨木が屹立する。木々に覆われた集落では、太古の人々が躍動している…。目の前に野生のエネルギーに満ちた熱海の風景が立ち上がってくるのだ。おそらく熱海に詳しい人ほど、慣れ親しんだ風景とのギャップに驚くはずだ。この不思議な感覚こそが『アースダイバー』の醍醐味だ。

この『アースダイバー』で、JRCが特に注目したいポイントは、縄文時代の地形や土地に残る伝説、神社などの聖域といった情報を互いに関連づけ、土地の持つ大きな〝物語〟として提示している点だ。たとえ地形や歴史の専門的な知識がなくとも、〝物語〟は我々の想像力を刺激する。そして縄文時代から現代へと続く歴史の連続性を串刺しにする『アースダイバー』の視線の深さが、その〝物語〟と現代の都市をリンクさせ、補強する役割を担っているのだ。領域を横断する膨大な知識と奔放な想像力を源泉に、中沢先生が紡ぎ出す〝物語〟の力強さには、土地の魅力を伝える者として学ぶべき大きなヒントがあるはずだ。

アースダイバーに学ぶべき観光業界的ヒントとはなにか

「日本は縄文時代の記憶が、色濃く残された国だ」と中沢先生は言う。一見合理的で効率的な『現代の思考』によって形成されているように見えて、町のあちこちで

縄文海進期の熱海温泉周辺の地形の上に、遺跡や神社などをプロットしたアースダイビングマップ。古くから陸地だった洪積層と、かつては海だった沖積層の2つの地層に分かれている。 ※遺跡は発掘された場所を示しており、現在見学できないものも含まれている

1万数千年前の『野生の思考』がひょっこり顔をだしているのだと。この「野生の思考」を丁寧にすくい上げ、土地の持つ物語へと転換するのが『アースダイバー』の基本構造。カギとなるのが、縄文時代の地形を現代地図にトレースしたアースダイビングマップだ。

実は今回のアースダイバーin熱海の後、このアースダイビングマップを持って、もう一度ひとりで熱海の町を歩いてみた。すると中沢先生のような知識がなくても、不思議と「この場所はなんだか匂うぞ」と、想像を広げ、宝探し気分を味わうことができた。そもそも歴史コンテンツは、ある程度の知識や興味を観光客に要求するため、熱心なファン以外にはハードルが高いもの。しかし、アースダイビングマップのような想像力を刺激するツールは、そのハードルをグッと下げる効果がある。

また、実際に『アースダイバー』を体験すると、有名な観光地よりもあまり整備されていない場所の方が、自由に想像力を羽ばたかせる余白が多いことがわかる。逆に近代的な都市計画で造られたハコモノ施設や道路、旧跡を見栄え良く造り替えた公園は、「野生の思考」を探る想像力に蓋をしてしまう。縄文時代から1万年数千年の時を経た今なお、「野生の思考」と「現代の思考」が複雑に絡み合うその土地ならではの特徴を残すためには、一見「合理的」に思える画一的な都市開発を見直す勇気も必要だろう。

さらにもうひとつ。観光地を歩くと、歴史的な名所の多くが、有名な武将や文豪に関連していることにも気付かされる。ただ、1万年規模で歴史を串刺しにする『アースダイバー』のような大きな舞台では、これまで語られなかった無名の人々の物語が、普遍的な存在感と共感を生むこともあるのだ。これは歴史上のスターに頼らずとも、歴史コンテンツ展開のチャンスはあるということだ。

不器用でも構わない まずは実践してみること

観光に携わる者にとって、数多くの示唆を与えてくれる『アースダイバー』。その効用を体験するなら、まずは一度、個人的にアースダイビングを試してみるといい。もちろん本家の中沢先生ほど緻密でアカデミックな分析はできないだろうし、雄弁に物語を語れるはずもない。それでもきっと、その土地に慣れ親しんだ地元の人間にしか見えない風景はある。そこにはきっと、旅人に語るべき物語のかけらがあるはずだ。

『アースダイバーin熱海』の締めくくりに、熱海秘宝館から温泉街を俯瞰する

アースダイバーから学ぶ

歴史コンテンツ展開のヒント

現代の日本を代表する知の巨人
中沢新一が生み出した
『アースダイバー』の概念には
観光に携わる者として学ぶべきことが多い。
JRCが『アースダイバーin熱海』を通じて
実感した歴史コンテンツ展開のヒントとは。

**歴史を楽しむには『知識と想像力』が必要
単なる『情報』ではなく『物語』を意識する**

歴史を楽しむためには、知識や想像力が求められる。ピンポイントの情報を羅列するのではなく、お互いを関連づけたその土地の物語として提示できれば、歴史はより多くの人々に伝わるコンテンツとなる。

歴史上のスターに頼るだけではダメ

現在の歴史コンテンツは、武将や文豪などの有名スターに関するものが多いが、一過性の人気になりがち。もっと長いスパンで土地の歴史をとらえられれば、スターに頼らずとも、より普遍的で大きな物語が生まれるチャンスがある。

**『想像力を刺激するツール』は
歴史コンテンツを楽しむための宝の地図になる**

見る者の想像力次第で、面白くも退屈にもなるのが歴史コンテンツの特徴。アースダイビングマップのような想像力を刺激するツールは、手軽に歴史コンテンツを楽しむための貴重な宝の地図になる。

**生モノ、リアルな体験から得る
情報を上回るものはない**

地形や遺跡、神話といった情報と現代の都市のつながりを感じるのも『アースダイバー』の魅力。町歩きや観光の際に、実際に歴史と、「今ここにいる自分」とが「つながっている」感覚を味わえるかどうかを検証してみる。

**「観光地化」されていない
場所やモノにこそアースダイブの余白がある**

近代的な都市計画から逃れた“余白”のような場所にこそ、縄文時代の「野生の思考」が色濃く残っている。効率や合理性を求めた観光地の整備は、そうした余白を奪ってしまう可能性があるので要注意。

**興味を持ったら、
まずは個人アースダイブをしてみるべし**

百聞は一見に如かず。まずは『アースダイバー』をじっくりと読み、実際に個人的アースダイビングを試してみる。示唆に富んだ『アースダイバー』の概念を体験してみることが、なによりの近道となるはずだ。